

## 夏の思い出

園長 児嶋 草次郎

9月に入り、昼間はまだまだうだるような暑さが続いています。朝夕は、少し秋を感じられるようになりました。早朝4時半頃に新聞が届き、5時半すぎに玄関の戸を開いて外に出ると、心地よい冷気が空から下りて来ていて、まだ姿を見せない太陽をイメージしながら、東の空へ向かって拍手をうちます。山桜はほぼ落葉を終え、夏を耐え抜いたナスビが次々に新たなつややかな実をつけ始めています。あたたかな抹茶をすすりながら、新聞を広げることから私の一日が始まります。さあまた気合いを入れて、与えられているこの命を、一日燃焼させます。

この夏も暑い夏でした。高齢化のせいでも感じるのではなく、地球がほんとうに温暖化しているようなのです。9月2日の読売新聞では、「気象庁は1日、今年の夏（6～8月）の日本の平均気温が、1898年の統計開始以降で最も高かったと発表した。」と報じていました。テレビでも毎日のように、「猛暑日」（35度以上）となった全国各地の都市を紹介していました。友愛園の稲刈りも、酷暑の中コンバインも導入して、手刈りは、半日だけにしました。秋野菜の種播きも、11月23日の収穫感謝祭をイメージしながら、8月末から計画的に行っています。時は待ってくれません。着実に行っていないと、収穫を随分遅らせてしまうことになります。この頃の一日は、本格的秋の三日分くらいに相当します。キャベツ、大根、人参は、いつも、収穫感謝祭の料理に使えることを目標にしています。

庭のサルビア、マリーゴールド、メランポジウム、ケイトウ等は、猛暑の中でよくがんばってくれました。いよいよこれからが出番です。

さて、この夏の報告を3件させていただきます。一つ目は、「第23回石井十次セミナー」です。4年ぶりに再開させていただきました。まだコロナ感染症が散発するような状況で、友愛社の保育園や施設からの出席者はできるだけ絞らせていただきましたが、それでもセミナーの方が220名ほど、交流会の方も来賓の14名を加えて100名ほど参加してくださいました。盛況でした。特に飛び入り参加のブラスバンド演奏（「藩校ブラスアカデミー」）は、参加者たちの心をつかんでいました。メンバーは高鍋町内の中学校・高校の吹奏楽部で、それを平成音楽大学教授の馬込勇氏が御指導・指揮くださり、岡山孤児院の少年音楽隊的存在として、このセミナーを盛り上げてくださっているのです。当時の少年音楽隊の少年たちの心意気をイメージすることができました。

8月26日午後に、私は宮崎空港まで、講師の二井仁美先生（奈良女子大学大学院教授）と、富田拓先生（北海道家庭学校樹下庵診療所児童精神科医師）のお二人を車で迎えに行きました。セミナー等の講師は、私はできるだけ自分自身でお迎えに行くことにしています。車中で、講演では聞けない話が聞けるからです。

お二人とも、私が大学を卒業後1年弱、北海道家庭学校で実習をさせていただいたことは知っておられますので、私は、お二人に次のようなナゾをかけさせていただきました。

「私が、北海道家庭学校で学んで、現在、石井記念友愛園で実践していることが三つあります。一つは毎月発行している『友愛通信』です。これは、家庭学校で発行している『ひとむれ』を真似したもの

です。岡山孤児院でも広報誌は発行していましたが、戦後の石井記念友愛社には、そのような余裕はありませんでした。しかし、その必要性を、家庭学校で改めて感じたのです。

あと二つはなんでしょう。友愛社に御案内しますので、発見してみてください。」

1時間ほどで友愛社に到着し、案内しながら、二つの解説をさせていただきました。ちょうど方舟館へ下りる友愛の道で立ち止まり、花園を指さしながらまず次のように話します。

「二つ目は、この花園です。家庭学校でカルチャーショックをうけたことですが、ハウスの中で野菜の苗と花の苗とが平等に並んでいたのです。二井先生が本の中で、『情緒的栄養』と説明されていたと思いますが、花は心の栄養。この花を作ることをこの友愛園で実践して来ました。今では1年中、花を欠かすことのない環境を作ることができています。」

これはさすがに言えませんでしたけど、6月末に家庭学校を訪問した際、「花は家庭学校を越えた」と感じました。おそらく、お二人もそう感じられたと思います。

三つめは、彫刻刀で彫った木の看板です。正門の看板や、友愛園三友館のベランダに掲げた何枚もの看板（多くは論語の言葉を彫っています）を指さしながら説明しました。

家庭学校の子供たちは、アイヌの文化と言える彫刻をやっていました。私も一緒にやり、それを持ち帰ったのです。最初の頃トーテンポールなどをみんなで彫っていましたが、いつの間にか看板に落ち着きました。収穫感謝祭が近づくと、何人かが自主的に彫り始めます。今や友愛園の文化となりました。

26日の夕は、二井先生、富田先生を囲んで、菊池義昭先生、宮城有隣園園長、それに私の5人で、食事を兼ねた打ち合わせを行いました。

27日午後12時半より「藩校プラスアカデミー」の演奏が始まり、皆さん聞き入りましたが、コロナが3年間続いたせいで、吹奏楽部の部員が集まらず、練習も大変だったようです。

講演・講義は「留岡幸助の志と北海道家庭学校の歴史と教育」（二井仁美氏）、『『生活が陶冶する』—北海道家庭学校の療育システム文化—』（富田拓氏）、「岡山孤児院の里親制から現代の里親制度を見る」（菊池義昭氏）の順番で行われました。

ここでは内容について一つ一つ振り返る余裕がありませんので、打ち合わせの時の話も含めて、強く印象に残った部分だけを何点か書かせていただきます。

1、北海道家庭学校と言えば、やはり「作業」です。職員と子供たちが一緒に汗を流し働くことで、子供たちは、生きる力を身につけていきます。私も実習でしっかり学びました。今年6月に訪れた時、午後、学校の先生方も一緒に作業に取り組んでおられる姿を見た時は感動しました。平成21年(2009)家庭学校には公教育（遠軽町立東小学校・遠軽町立遠軽中学校望の岡分校）が導入されています。おそらくこの時、家庭学校にとっては、一つの危機でもあったはずですが、どのようにして、その福祉文化を守ったのか。二井先生の説明によると以下のようなようであったとか。

私が家庭学校で実習をした時の校長は谷昌恒先生。その下で教務をされていた先生が森田先生（下のお名前は覚えておりません）でした。遠軽町教育委員会の中に学校教育を家庭学校に設置するための検討委員会が設置された際、なんと森田先生の息子さんが小学校の教頭として在籍しておられたのだそうです。私の実習当時、職員は皆家庭学校内で生活しておられ、その息子さん、森田穰先生もその家庭学校の文化について十分に理解されておられ、委員会の中でその福祉文化を守ることに奔走してくださいだったのでないかとのこと。森田穰先生も、『『家庭』であり『学校』であること』（北海道家庭学校）の中で、次のように書いておられます。

「家庭学校の教育理念である『流汗悟道』の精神は、分校の教育課程にも積極的に取り入れさせていただいています。作業着や運動着姿の教職員が子供たちや家庭学校の職員と一緒に汗を流すことは、

分校の教育の重要な部分を占めると考えています。」

2、富田先生の話は、現場で5年間、指導員として働かれた（夫婦で一寮担当した）だけに、非常に説得力のあるものでした。

- ・家庭学校に来る子供たちの多くは、家にいた時は皿が飛びかたりボコボコにされたりするような環境の中で育っていた。普通の夫婦関係、親子関係を知らない。家庭学校で、ごく普通の安定した生活、つまり、朝起きて夜寝る生活、3食食べる生活、学校に行って、運動や作業をやって、夜はくつろぐという生活を日課として繰り返す、ルーティンな生活をして、その生活を「心地いいな」と感じられるようになれば、大成功である。富田先生は、寮の中で夫婦ケンカみたいなものをして、その後普通に夫婦で会話している姿を見るのも子供たちにとっては驚きであるというような話も紹介されました。こういうところが「生活が陶冶する」の本質的な部分でしょう。
- ・家庭学校でのケアの中心は、心のケアを含めて、あくまでも寮長・寮母であり、精神科医、心理療法士は、そのサポート役である。子供が、自分のことを考えてくれていると感じることが心のケアである、とも言ってくださいました。現場の指導員や保育士がいくら声を大にしてこういうことを言っても、ただ強がっているようにしか聞こえませんが、医師が言うと、重みが出ます。現場の職員たちにとっては、励みになる言葉ですし、その責任の重さを自覚し、やる気も湧いてくるでしょう。
- ・家庭学校の文化に子供を乗せることができれば「なんとかなる」。背景となる文化なしに生活は成り立たない。その文化の一つが「作業」であり、勉強ができたり、スポーツができるより、作業ができる方が偉い、そういう価値観（文化）がある。

富田先生は今年5月の「アジア児童青年精神医学会」において、この夫婦の小舎制について報告されたそうですが、あるインドの人から、次のようなコメントをもらったと最後に紹介されました。

「極めてアジア的な家族形態を生かした治療・養育構造だと思う。個人主義的な欧米と、アジアの家族は大きく異なる。欧米のものをそのまま受け入れるのではなく、その文化圏に応じた治療・養育構造を創っていくべきだ。」

3、今回の交流を通し、私自身が新たに気付かされたこともあります。

北海道家庭学校を再訪しようと決断し、否その前に、今回のセミナーで北海道家庭学校をテーマとして掲げるきっかけになったものがあります。「石井十次資料館研究紀要」第19号において、巻頭言で、二井先生が私の家庭学校での実習のことを書いてくださったのです。子供を4人付けた作業班を任せられ、その報告の文書を「ひとむれ」の中から発見されたのです。50年も前に書いたものを、何かの作業中におそらく偶然見つけ出され、それを私の前に提示してくださいました。今回もセミナーに来られた時に、後にも先にも実習生に一つの作業班を任せしたのは家庭学校で初めてのことでなかったかと思います、と二井先生は言ってくださいました。

私は戦後の石井記念友愛社の歴史を、長い間、「岡山孤児院文化の発掘作業だ」と言い続けて来ました。

私の今回の気付きとは、父も私も、北海道家庭学校の中に、先人たちの築いた福祉文化を掘り出すことに必死であったのではないかということです。そしておそらく、私は当時あまり意識・自覚はしてなかったのですが、校長の谷昌恒先生も、私を受入れてくださった家庭学校の主要な先生方も、そのことを察して下さって、私にチャンスを与えてくださったのだろうと感じられるようになったのです。あらためて感謝の気持が湧いて来ます。

そして今、家庭学校から盗んで（学んで）来た福祉文化が三つあります、と胸を張って言えるようになりました。日本の歴史を振りかえってもそう感じるのですが、大陸からの文化の輸入、明治以降

の西欧からの文化の移入等を見ても、長い年月をかけて、少しずつ定着していくものなのでしょう。30年40年時が経過し、気付いた時に、そこに新たな文化として人々の生活を支えているものなのだと思います。今、社会的養護の世界で行われようとしていることは、法律で決めてマニュアルで強引にアメリカ化していく、一種の革命ではないか、そんな気もして来ます。

次に二つ目の夏の思い出です。50年前、私が北海道家庭学校から友愛社に帰って来て、指導員に成り立ての頃、一緒に生活していた卒園生のK君が突然、9月に入って広島から帰って来たのです。何十年ぶりでしょうか懐かしく、理事長室で3時間くらい話をしました。K君は高校を卒業して、広島の当時一流のレストランに就職し、60歳定年まで勤めあげて、この春退職されたのです。春には退職記念にまとまったお金を寄贈してくださっています。

エネルギーで責任感の強い少年だった彼も、私と同じように白髪まじりのじいさんに変身していました。人生の総括期に、こうして石井記念友愛社で育ったことを、「おかげで社会でがんばれた」と誇りにしていただけのことをありがたく思います。

父親を早くに亡くし、母子世帯で大変貧乏をしたことを、今回話してくれました。

小学4年生の時、古い時代の天心館（小学生寮一今の友愛園から500m以上離れた所にありました）に入所。その後、私が指導員としてこの天心館に赴任しています。天心館時代を振り返り、彼は次のように言いました。

「家ではしつけらしいしつけを受けてなかったので、天心館時代は、歯を磨いたり顔を洗ったり、基本的生活習慣を身につけるのが大変でした。食べ物も家にいた頃に比べると、ゼイタク（肉など食べたことがなかった）で、天国みたいでした。」

小学6年生を卒業し、中・高生寮の三友館（現在の本部事務所）へ送り出しましたが、間もなくその三友館の指導員が退職し、急きょ私も三友館に転勤となりました。一つの寮（館）に、当時は指導員（男性）1人、保育士（女性）1人の時代で、右も左も分からない私も心細い思いでおりました。しかし、天心館時代一緒に生活したK君他4、5名の子供たちが随分助けてくれました。K君は中学・高校へと進むに従ってリーダーシップを発揮し、高校時代になると、私の片腕のような働きをしてくれました。

「友愛社で鍛えられたので、社会で生き抜いていくことができました。あのまま家庭にいたらダメだったと思います。」と、彼ははっきり言うてくれました。1年間は身の整理をしながらゆっくりし、次の人生を考えていくのだそうです。

結婚して家も作り、二人の子供も巣立ち、これからは、誰からも拘束されない悠々自適の生活をするのでしょう。幸せそうに見えて、うれしくなりました。

今子供を支援をする時、「家庭」とか「家庭的」を最重要視します。それが国の政策となっています。しかし、その内容についてしっかり考えようとはしません。イメージ戦略と言ってよいのかもしれませんが、「家庭＝幸せ」という刷り込みをしているのです。生活の場が「家庭」や「家庭的」であるにこしたことはありませんが、もっと大事なことは、その子供の運命を変えるような生活力、生きる力、自立力をつけさせてあげることなのだと、K君と話しながらあらためて思いました。

三つ目の話というより、これは報告です。石井記念友愛社では今年度母子生活支援施設を都城市内に立ちあげます。それともう一つ、高鍋町内の石井記念明倫保育園を改築し、小規模児童養護施設との複合施設とします。隣接する古い建物も改修して、障がい者通所施設とし、合わせて共生施設「友愛の森」事業と総称し、地域の発展に貢献する計画です。

この二つの事業の建設業者がようやく決まりました。どちらとも、一回の入札では決まらず、工事

が少々遅れてしまいましたが、これから3月末にかけて、がんばってくださることでしょう。石井十次没後、児嶋琥一郎生誕110年という節目となる記念事業として位置づけています。

ただ、障がい者通所施設に転用する古い建物（せいごろう亭）については、まだ改修費用のメドがついておらず、近々、寄付募集（クラウド・ファンディング）をも検討しています。その時には、皆様、御支援のほど、よろしくお願い致します。